2014 年 6 月

# 留学先決定に至るまでの経緯

2014 年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生
東京大学大学院経済学研究科博士課程
野田俊也

秋よりスタンフォード大学経済学部（Stanford University, Department of Economics）の博士課程へ留学予定の野田俊也と申します。現在は東京大学経済学研究科の博士課程に所属しており、これまでに経済学の学士・修士を同大学から取得しています。本レポートでは私のこれまでのバックグラウンドや関心のある研究の分野にも触れつつ、学位取得を目指し、スタンフォード大学に進学を決めた経緯をご説明させていただきます。

## 1. 大学院進学及び留学を志すまで

私が大学院へと進学し、本格的に経済学の研究に取り組もうと決意したのは、学部４年の初めごろのことでした。前期教養課程を終え、経済学部に進学する以前は正直、自分が大学院に行くなどとは考えたこともありませんでした。文科二類を受験して経済学部に進学したのも、当初は経済学よりも経営学に興味があったからですし、学部３年の頃には就職活動も行い、内定もいただきました。そんな自分が突如学問の道を志した理由は、数学のモデルを使って社会の様々な現象に統一的な説明を与え、ジレンマを解消する道を模索する理論経済学、特に制度設計論という学問が非常に面白く、また自分に向いているのではないか、と直感したからです。

大学院進学を決意したならば、アメリカの大学院に進学しようと考えるのは、経済学界においては極めて自然な発想です。経済学の分野で一流と呼ばれている大学群、最先端の研究を行っている研究者らの多くはアメリカに集中しています。また、経済学はアメリカでは非常に人気の高い分野ですから、優秀ならば学費は免除、生活費も支給されるという厚待遇で迎えられ、博士号の取得後には、研究職のみならず、民間企業への就職の道も開けています（この点は特に、経済のような文系の大学院に進学すると民間企業へ就職できなくなる、と言われている日本とは大きな違いではないでしょうか）。このため、日本のみならず、世界各国から最も優秀な学生たちがアメリカのトップスクールへ留学してきます。

このような事情から、東京大学の経済学研究科では「修士課程を終えた後、アメリカの大学の博士課程へ進学する」という進路が１つの典型的なルートとして確立されており、優秀な学生の多くはこの道をたどります。FOS の同期の奨学生たちや、既に留学されている先輩方には、家族の事情や学部生の交換留学等で外国での生活を経験されている方も多く、この辺りの経験から留学を決めた方もいらっしゃるようです。しかしながら私が留学を決めた理由は、研究者になる上で留学をすることが当然の過程であったからです。

## 2. 留学に向けての準備

経済学の大学院留学を成功させるために準備しなければならないものは、大まかに言って推薦状、成績、英語力、writing sample、奨学金の 5 つです。幸いなことに、私は大学院科目で良い成績を取ることができており、学部生の頃から先生方とお話しさせていただく機会も多かったので、推薦状と成績に関しては自然と準備が整いました。writing sample と呼ばれる、これまでに行った研究の成果についても、修士論文でそれなりに良い研究ができていたので問題はなく、奨学金はご存じのとおり、Funai Overseas Scholarship にご採択いただくことができました。

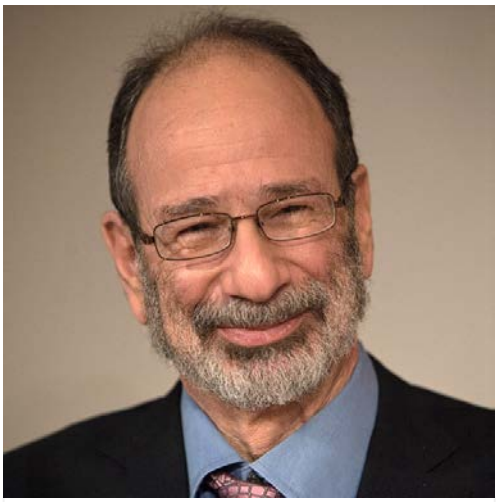
一番苦しんだのは間違いなく英語です。それまでに私は海外に滞在した経験は全くなく、自力で海外旅行をしたことすら、大学の卒業旅行が初めてでした。純粋に国内の環境で育った学生の間でも、私の英語力は秀でているとは言い難く、大学入試の際も英語は苦手科目でしたし、学部 3 年生のときに受けた TOEIC は 645 点、4 年生のときに受けた TOEFL iBT は 77 点でした。この点数は一般的にはそう悪くないかもしれませんが、語学が得意な学生の多い東京大学の経済学部では底辺と言ってよい数字で、語学が得意な友人たちによく英語の拙さをからかわれていました。東大の経済学部では、大学院と合同の講義は基本的に英語で行われるのですが、外国人教員の喋る流暢な英語が全く聞き取れず、後で教科書とスライドを見返して必死でカバーしていたこともあります。

しかしながら、近い未来に自分が高い確率で留学するという環境に置かれれば人間は勉強するもので、死にもの狂いで勉強した結果、修士２年の夏ごろには無事 TOEFL iBT で 104 点を取得し、ひとまず英語話者と一応のコミュニケーションを取れる水準にまで達することができました。東大の大学院の、日常的に話す言葉は日本語でも、教科書は英語、論文は英語、授業も基本的に英語と、当初は苦しんだ英語漬けの環境が英語力の改善に非常に役に立ったと思います。留学を考え始めてからの数年間で随分英語力は向上したと思いますが、まだまだ日本語と同じレベルで不自由なく意思疎通ができるわけではないので、今後も精進を続けたいと思っています。

## 3. 出願と進路の決定

こうして数年がかりで準備を整え、アメリカの大学院 9 校へと出願を行い、スタンフォード大学、プリンストン大学、イェール大学、シカゴ大学、ノースウェスタン大学ケロッグ校、ニューヨーク大学、ペンシルバニア大学から合格をいただき、最終的にスタンフォード大学への進学を決めました。

スタンフォードに最終決定した理由は、自分が専門にしたいと考えている理論的な制度設計論、そしてキャリアを積んだ後に貢献したいと考えている制度設計の実践において間違いなく世界最高の大学だからです。この分野についてスタンフォードの教授陣の層は非常に厚く、特に 2012 年に制度設計論とその現実への応用でノーベル経済学賞を受賞した Alvin Roth、アメリカでの周波数免許割り当ての入札制度の生みの親である Paul Milgrom、私が修士論文以降、メインテーマとして取り組んでいる動学的環境における制度設計という分野を創り出した Susan Athey、Ilya Segal、Andrzej Skrzypacz らは、私の関心と密接に関わった研究をしており、留学後にぜひ指導を受けたいと考えています。日本人では、理論経済学者として大変な評価を受けている小島武仁先生と菅谷拓生先生のお二人が在籍されています。経済学を専門とされていない方にはニュアンスが伝わりにくいかと思うのですが、実は経済学研究者の大部分はデータを使って実証分析を行う計量経済学や、国家の経済状態の動向を分析するマクロ経済学を専門としています。このように大勢のミクロ経済学の理論、しかもその一領域である制度設計論を専門とするトップレベルの経済学者らにご指導いただける環境は、世界中見渡しても他にありません。



Alvin Roth By Bengt Nyman (Flickr: IMG_4793) [CC-BY-2.0 (http://creativecommons.org/licenses/by/2.0)], via Wikimedia Commons

留学までに専門を決めていない学生、当初の予定と違う分野を専門とする学生は非常に多いらしいのですが、少なくとも私は出願時点では制度設計論を研究したいと考えていたので、結果を見る前から「スタンフォードに行きたいなあ…」と思っていました。この先、専門を変えたというご報告をする可能性もありますが、少なくとも現時点では第一志望の大学に合格して大成功だと思っています。

## 4. 最後に

渡航日は 8 月 24 日に決まったので、日本を発つまであと 2 ヶ月余りとなりました。今は予防接種・ビザ申請などの渡航までの準備や、日本にいる間に仕上げておきたい共同研究に追われています。最後になりましたが、このような貴重なご機会を与えてくださった船井情報科学振興財団の皆様に心より感謝の意を表したいと思います。ご期待に応え、社会に貢献できるよう、全力を尽くします。